



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	語彙教育の単位としてのコロケーション
Author(s)	バックハウス, アンソニー・E
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 10, 125-134
Issue Date	2006-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45665
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC010_007.pdf



語彙教育の単位としてのコロケーション

アンソニー・E・バックハウス

1. はじめに

言語によるコミュニケーションにおいて、語彙の意味・用法が非常に重要な位置を占めていることは言うまでもないが、文法教育・漢字教育が中心になりがちな現在の日本語教育では、語彙教育に必ずしもウエートが十分に置かれているとは言えない。語彙は一般的に単語中心に考えられているが、本稿では語彙教育を強化する一つの有力な要素として、コロケーションの重要性について考えてみたい。

2. コロケーションとは

コロケーションは特に英語辞書学やコーパス言語学で研究されてきた概念と言えよう (Sinclair 1987, 1991)。また、英語教育では Lewis (1993, 1997) もその重要性を強調している。さらに、近年日本語教育においてもコロケーション研究がなされ始めている (大曾 (2005) 参照)。コロケーションの定義は分野や学者によって異なるが、ここでは次のように定義したい。

- (1) コロケーションとは、ある構文パターンの中で、一定の頻度で使われる二つ以上の語彙的単語の組み合わせをいう。

日本語の例としては、次のようなものが挙げられる。

(2)

- | | |
|-------------------|--|
| N (補語) + V (述語) | 雨がやむ、雪が積もる、疲れが出る、(Xに) 穴が空く、本を読む、ピアノを弾く、シャワーを浴びる、薬を飲む、タバコを吸う、かぎを開ける、パーティーを開く、電車に乗る、お風呂に入る、電話に出る |
| N (補語) + Adj (述語) | 体が大きい、足が長い、様子が変わる、日本 |

Adj (修飾) + N

V/VP (修飾) + N

N (修飾) + N

Adv (修飾) + V

Adj (修飾) + V

Adv (修飾) + Adj

語がべらべらだ、機械に弱い、駅から近い
寒い日、熱いお湯、厳しい表情、細かいお
金、膨大な数、抜本的な改革、正式の名称
湿った雪、乾いた布、変わった名前、ぐず
ついた天気、ぱっちりした目、緊迫した情
勢

バケツの柄、なべの底、バットの先、口の
奥、廊下の突き当たり、6月の中ごろ

早く寝る、よく食べる、大いに期待する、
じっくり考える、べらべら喋る、がらっと
変わる

細く削る、きれいに洗う、茶色に染める、
粉々に割れる、かちかちに凍る、パンパン
に膨れる

非常に難しい、すごく面白い、めちゃくちゃ
にうまい、極めて重要だ、大してうまくな
い、あんまりよくない

上記の例は「すごく面白い」のようなごく自由な組み合わせから「べらべら喋る」という結合度がより高いものまで含んでいるが、本稿ではこの差にこだわらず、語彙教育の立場から、自然な、しかも一定の頻度で使われる組み合わせであれば、学習者にとって覚える価値があるコロケーションと見なす。

3. コロケーションの教育上の意義

上記のようなコロケーションは様々な面で語彙教育に役立つと思われる。

第一に、当然のことながら、ある単語を実際に使うためには普通、他の単語と組み合わせなければならない。辞書や教科書の単語表では単語の意味内容が中心的に取り扱われているが、単語の内容を理解することと、単語相互の組み合わせのありかたを含めたその用法が分かることとは別問題である。日本語学習者の不自然な言語表現の多くが不適切なコロケーションに起因していると言えよう。つまり、文法が合っていても、単語の組み

合わせが不適切なら、どうしても日本語らしくない表現になってしまう。そこで、コロケーションは、自然な組み合わせのモデルを提示することで、学習者における語彙の連想作りにも役立つと思われる。

次に、日常の言語行動において、特定の単語の組み合わせが繰り返し使われていることがしばしば指摘されている。例えば、「本を読む」、「タバコを吸う」、「電車に乗る」などの日常生活のありふれた行為を表すコロケーションは言語コミュニケーションの中の基本的な組み合わせと言えよう。このように頻繁に使われるコロケーションを覚えることによって、学習者は理解と産出の出来合いの単位を習得することになる。

第三に、言語間の語彙の違いの面白さを挙げたい。L2のコロケーションには、L1から考えて予想できるものもあるが、そうでないものも多い。簡単な例を挙げると、「コーヒーを飲む」は英語の「drink coffee」から考えても当然のコロケーションと言えるが、「薬を飲む」(英語では「take medicine」)、「スープを飲む」(普通は「eat soup」)などはそうではない。同様に、イギリス英語では「bath」も「shower」も「have」と組んで「have a bath」、「have a shower」と言うが、日本語ではそれぞれ「お風呂に入る」、「シャワーを浴びる」という違ったコロケーションになる。コロケーションにはこのような言語間の違いが表れ、これが学習者に語学への関心を高める重要な要素にもなる。

最後に、コロケーションは、語彙とともに、文法も含んでいることを忘れてはならない。コロケーションの学習は語彙の自然な用法を示すとともに、基本的な構文パターンの強化にもつながる。

4. 具体例を考える

ここで具体的な観点から、意味内容から見て四つの違う種類の単語を取り上げ、それぞれについてコロケーションの役割や重要性について考えていきたい。最初に取り上げる二種類は、意味的に特殊なグループで、コロケーションの重要性が一目瞭然と言えようが、後に続く二種類の単語では、比較的平凡な単語に関しても、コロケーションがいかに重要かが見えてくるとと思われる。

i) まず「かける」という動詞であるが、このような多義語は具体的な内容から抽象的な内容まで意味・用法の幅が広い。文脈によっては、「かける」

の意味内容はかなり薄れ、特定しにくいものになる。これは特に次のような例で顕著と言えよう。

- (3) プレーキ／クーラー／エンジン／目覚まし／音楽をかける
（だれかに）声／電話／プレッシャー／迷惑／心配をかける
（なにかに）お金／時間／手間をかける

辞書では、「かける」の意味解釈は細かく区分されており、それぞれ用例で示されているが、このような単語を学習する場合は、最初からコロケーションで覚える方が効果的だと思われる。考え方によっては、上記の例は慣用句も含んでいると見るのが妥当かも知れないが、いずれにしても一つの単位として覚えるべきものと言えよう。「かける」のように語彙的内容が薄れた用法を持つ他の動詞としては、「かかる」、「つく」、「つける」、「与える」、「受ける」、「とる」などが挙げられる（村木1991、第3部参照）。

ii) では(i)と逆のケースで、語彙的内容が濃く、共起範囲が狭い単語を取り上げてみよう。

- (4) てくてく歩く、げらげら笑う、ぐっすり眠る／寝る、ぐるぐる回る／巻く

例えば「てくてく」という単語を使うためには、普通「歩く」という動詞と組み合わせなければならないので、始めから「てくてく歩く」というコロケーションで学習した方が効果的である。このような単語は特に擬音擬態語などに多いと思われる。（擬音擬態語には、この他に「びっくり」のように、「する」としか共起しない、むしろ(i)に位置付けるべきものもある。いずれにしても、擬音擬態語の多くはコロケーションの中で学習することが重要なのは明らかである。）

iii) 続いて、(i、ii)のやや特殊なケースから離れ、もう少し平凡な単語に目を向けることにして、例えば「テレビ」という単語を考えてみよう。意味内容から言えば、どの言語にも「テレビ」にぴったり当たる単語がありそうだという点で $L1 = L2$ の典型的な例と言えよう。つまり、「テレビ」

= 「television」が分かっているならば、語彙の知識としてはこれで十分に見える。しかし、このような場合でも、「テレビ」という単語を実際に使うとなると、やはり他の単語と組み合わせる必要があり、そこでコロケーションの自然さにおいて言語間の違いが問題になってくる。このことは英語の「television」について Fox (1987: 137) も指摘している。以下の日本語と英語のコロケーションの例を比べてみよう。

- | | |
|-------------------|--|
| (5) テレビをつける | put on/turn on the television |
| テレビを消す | turn off the television |
| テレビがついている | the television is on |
| テレビを見る | watch television |
| (だれか／なにか) をテレビで見る | see (somebody/something) on television |
| (だれかが) テレビに出る | (somebody) appear/be on television |

ここに日本語と英語のコロケーションのずれがはっきりと出ている。例えば英語の「put on, turn on」は、日本語では「入れる」、「かける」などにも該当する場合があるが、「テレビ」の場合は「テレビをつける」が自然なコロケーションとなる。(iii) のようなケースは特に名詞に多いと思われる。

iv) 最後のケースとしては、「テレビ／television」のように $L1 = L2$ の場合ではなく、 $L1$ の一つの単語の意味領域に対して $L2$ では二つ以上の単語が存在する場合を考えてみたい。代表的な例として、英語の「cold」に対する日本語の「寒い」と「冷たい」を取り上げてみよう。「寒い」と「冷たい」のおおよその内容はそれぞれ、〈体全体で不快なほど気温が低く感じられる〉と〈触ったときに温度が低く感じられる〉だとすると、英語を母語とする学習者なら、まずこの内容の区別を理解し、習得する必要がある。この段階で、内容の説明に加えて、次のような基本的なコロケーションを覚えることがその消化過程の手助けになると思われる。

(6) 寒い日／季節

冬は寒い

寒い国／所

冷たい雨／水／ビール

冷たいもの（を飲む）

しかしこの場合、コロケーションの役割はこれだけにはとどまらない。なぜなら、上記の内容の区別が分かったとしても、学習者にとって「寒い」と「冷たい」のどちらが自然なコロケーションになるか分からないようなボーダライン・ケースが出てくるからである。例えば「風」がその一例だが、風は体全体に影響するものと捉えて、「風が寒い」の方が適切だろうという理屈は英語圏の学習者なら十分に成り立つ。また、体の部分に関しても同じようなことが起きる。上記の定義から、体全体で感じる感覚なら「寒い」が、体の部分を触った時の感覚なら「冷たい」がそれぞれ適切な表現だと理解していても、体の一部分で感じる感覚の場合はどうなるのかがよく分からない。そこで、どのようなコロケーションが普通に使われているかを知ることが不可欠になる。

(7) 風が冷たい

足（＝feet）／手が冷たい

足（＝legs）／足元／背中が寒い

コーパスを見ると、(7)に示すように「風／手が冷たい」、「足元／背中が寒い」が圧倒的に多い組み合わせになっている。「足」に関しては、「寒い」も「冷たい」もどちらも多く使われているが、上に示したようにこの両方の間で「足」が指し示している部分に違いがあるように見える。体の部分の場合は、体のより中心的なものについては「寒い」、より周辺的なものについては「冷たい」がそれぞれ使われていると言えそうである。

この (iv) というケースには他にも「water」に対する「水／お湯」、「thick」に対する「太い／厚い」、「break」に対する「壊れる／割れる／折れる」のように数多くの基本的な単語があるが、その使い分けをマスターしていない学習者が中級レベルでも多く見られる。例えば「水／お湯」では、「水」は使うが「お湯」は使わない学習者が多く見られるが、初級レベルから「水

が冷たい」、「熱いお湯」、「ぬるいお湯」、「お湯を沸かす」のようなコロケーションを紹介しておくのが有効であろう。さらに、「壊れる／割れる／折れる」の例では、「壊れる」は知っていても「割れる」、「折れる」を十分に把握していない学習者が少なくない。語彙教育のより早い段階で「コンピュータ／テレビが壊れる」、「皿／ガラスが割れる」、「枝／骨が折れる」のようなコロケーションの形で導入すべきだと思われる。

以上、四種類の単語を取り上げながらコロケーションについて考えてきたが、いずれのケースにおいてもコロケーションの教育上の価値を裏付けるものと言えよう。

5. 最後に

結論として主に次の三点を挙げたい。まず、言語におけるコロケーションの重要性であるが、Lewis (1997: 97) は「The real definition of a word is a combination of its referential meaning and its collocation field」(「単語の本質はその指示的意味とその共起の範囲の両方からなっている」)と述べている。従来の意味論や辞書学では意味内容の方にウエートが置かれてきたが、言語行動および語学教育においては、コロケーションを含めた用法も非常に重要な側面であることを軽んじてはならない。

第二に、コロケーションを語彙教育にどのように取り入れるかであるが、この点についても Lewis が色々と指摘している。先ず学習者にコロケーションの存在と重要性を意識させる必要がある。例えば、クラスで使用した会話教材・読解教材などから、よく使われるコロケーションを教師が取り出し、早い段階から復習教材に使うことが望ましい。どのようなコロケーションが頻繁に使われ学習に価するかについては、教師の判断が大切であるが、学習者がコロケーションの重要性に気付いた段階では、学習者自身にそれらを集めさせ、語彙帳に記録させることも有効になってくる。学習者にとっても、教師にとっても、単語表中心の語彙教育から、コロケーション表を取り入れた語彙教育へと、意識をシフトすることが重要になってくる。

最後に、日本語学の仕事としては、コロケーションの種類に関する研究やコーパスに基づいた頻度についての研究が必要である。コロケーションの種類としては、例えば(2)で挙げた構文パターン以外にも重要なものがあるであろうし、さらに細分化する必要もあるであろう。日本語のコーパス

言語学が進むにつれ、ジャンルの観点からのコロケーション研究も重要な分野となるであろう。そして、大曾（2005）が指摘するように、これらのコロケーションに関する情報を豊富に盛り込んだ学習者用辞典の開発が今、日本語教育にとって非常に重要な課題となっている。

注：

本稿は2006年2月に北海道大学・ハワイ大学ジョイントシンポジウムで発表したものに加筆、修正したものである。

参考文献：

- 大曾美恵子（2005）「コーパスによるコロケーションの特定 ―日本語学習辞書の充実を目指して―」、影山太郎（編）『レキシコンフォーラム』No. 1、ひつじ書房
- 村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- Fox G（1987）'The case for examples', in Sinclair（ed）1987
- Lewis M（1993）*The Lexical Approach*. Language Teaching Publications
- Lewis M（1997）*Implementing the Lexical Approach*. Language Teaching Publications
- Sinclair J M（ed）（1987）*Looking Up*. Collins ELT
- Sinclair J M（1991）*Corpus, Concordance, Collocation*. Oxford University Press

アンソニー・E・バックハウス（留学生センター教授）

Collocations as units for vocabulary acquisition

Anthony E BACKHOUSE

This paper argues for the importance of collocations, as opposed to single words, as basic units in L2 vocabulary acquisition. Collocations are defined here as commonly occurring combinations of two or more lexical words in a syntactic construction: examples are *ame ga yamu*, *ofuro ni hairu*, *karada ga ookii*, *atsui oyu*, *kawatta namae*, *nabe no soko*, *hayaku neru*, *kirei ni arau*, *hijooni muzukashii*. Collocations are seen as providing models of natural language use which contribute to both understanding and production; they highlight interesting points of difference as well as similarity between languages; and since they involve syntactic constructions, they also reinforce the acquisition of grammar.

The importance of collocations in acquisition is discussed with reference to four semantic types of Japanese words: verbs which are used in highly general meanings such as *kakeru* (as in *bureeki o kakeru*); mimetic adverbs like *tekuteku* whose meanings are, by contrast, very specific; nouns like *terebi*, whose meanings are arguably identical with L1 items; and cases like *tsumetai* and *samui*, where two or more L2 items cover the semantic range of a single item in L1 (as with Eng *cold*). In the first two cases, the need to acquire collocations like *engin o kakeru* and *tekuteku aruku* is self-evident, but even with semantically unremarkable items like *terebi* the control of collocations such as *terebi o tsukeru* is necessary if the word is to be used naturally in sentences. With *tsumetai* and *samui*, collocations like *samui hi* and *tsumetai mizu* serve to reinforce the basic semantic distinction between these two words; even when this distinction is grasped, however, borderline cases for learners still arise, and further collocations such as *kaze ga tsumetai*, *ashi ga tsumetai* ('feet feel cold'), *ashi ga samui* ('legs feel cold') provide models of natural use in these areas.

As Lewis and others have stressed, control of vocabulary requires

mastery of the behaviour of words in combination as well as of their individual meanings, and increased focus on collocations appears to offer great potential benefits for vocabulary acquisition. This needs to be supported by further studies of collocation patterns and corpus frequency in Japanese linguistics, and by the incorporation of more detailed collocational information in Japanese learner dictionaries.